

幽遠隨筆

乾

幽遠隨筆

和書門		二六七八	函	架	冊
		二九八	函	架	冊

25

內閣文庫		和書
二六七八	函	架
二九八	函	架

(一冊)

隨筆 六ノ四

內閣文庫	
番號	和 26758
冊數	2 (1)
函號	212 85

212-85



頌出

孝

筆

有淺草文庫

綠竹如竿黃友一壺舉觴

擊楫穿袖撫髯須醉以洩憤

翰墨自娛身之遺逸卷懷自

愚入江易善今有之去此也

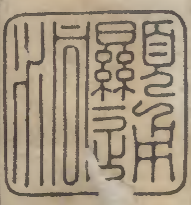
其男易之造廬示一緡帳家

嚴華書善生所述百家卷第
首端國風派涉佛儒燒香觀之
若記子珠况乎錄彼經翼其語
腴胃久謀于今訂魯魚公之
梨棗公于四隅予嘗之安矣
叙于予、次疾病少之果而

戲誦歌臣出弟代能章米
多次瀾言之錄入江昌春介
葛于吾彌玉遠處閑難其
片語獅子產誦家小呼

甲午七月丹史書于燕山

你處





上より下へ
 一ノ事
 見
 の
 秋
 子
 う
 可

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as ghostly impressions within the ruled lines.)

ゃ~~~~~あきつらあはは
 くも三女お海土人ひり
 加身ははあつりひりまな
 くのつたあ~~~~~あつたあ
 であは~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 へあ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 へあ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~

あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~
 あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~

おのれを南つていさへし
おのれを北つていさへし

抄

幽遠隨筆卷之上

○古人いへるゆあり。中ふし守紀とりあひ。人よ交を好む。
身如志川ききとくはく。花の咲ちるを阿それと。月
の出入るを思ふ小ほけり。常ふ心をきぬて。世乃
濁りきずぬれこもすれど。おのつくり生滅のことわりも
あつちれ。名利のよきもはばよぬへしと。講よ名
をうつと法をうら。まける道をゆく。抱とあつ
そり。己をきめしとん。いさくりん乃うちすし
かむ。庶幾まへと

己限乃身いせしと

梅やわ小ゆげと世をさるるはをい

○基俊御長はまの御母にゆきまの御孫に弘雅なる物も
物を難はる御ありて却ておぼしハ多しなれども
存道なるも御。今時の人ハさせ居才学もあつくはつた
小聞受へたんとてきふるをもおのれがささるは
ーくさして。依を難はるも御多し。常ハ小い
ひーら言葉をどおし。かこもきく人假法と
おぼしたし。それゆへ小いふ人より。うこふま又
ハゆるふものかゝるまことに由へあはしむるも
通

○今鄙俗のことゆふ。酒堂子録をほるといハ。酒
代りり系系集り

はの御叔父のまゝとられどいふうけ人かゝる御代
はまれくといハ。まるとまれど之かりてといハ。旅の宿かた代
物之借代かりてとあり代の字舊事記日本紀などにてと讀
るり又菅家萬葉小直ちといあり

○又俗間小おをたたく人といて。久ーくながる御。並古一
といよも日集り

わてはや難波すさぎおきざり。故ハ強き人かこちかきよ
○又年考は人をふるまはるといハ。字大御を。物取よ
國經乃大御と申人ありり。をま小在京の中御と
いふ人の娘なるもいふはうもさよげ小うつと
大納言ハ年六十少餘り。北の方ハワケまよさるはうのそ

せかりしをいふもあはれき人よ。むづろ人よ
ごうたをよ。ふゆのぬるにありひそむる。本院の人の
人ふまゝのゆゑをえて。いふれ人か。かゝる人よ。い
あゝん。年老ふくした人。うぐいさよあれてわ
びーくふかゆとくまゝ。略文

○又まふといふべしとあり。ことと云も。松葉紙小あぢ
事を書きやうはきとぞ。あーとまぐても。ゆけうげあど。
かゆくく。地をまらとま。あーこ。か。彼所
とかと通

○物を捨てるといふをさふと云も。四季抄
やぐしめとを川小ふとあり

○又柏小葉をさふと云も。いづれが納ま。松葉紙の紙
つろろごをいふと云。あーとま。喪ツクスと云。法苑珠林

○はめと云と云。艶詞藤原隆信作常よりものか
まーと云。ほふーと云。に。袖のほろと云。うぬふさ

をれと云。又松葉紙小葉をさふ。紙のれど。ちー出
さをめつ。ゆきのりつふ。えゆ。いづう。むひき。
まね梅る紙。はう。たう。め。と云

○悔を何なづると云も。紫式部日記。おささ。と人の
あをけり。さう。れ。とあり。と云

○すげまねと云も。岷江入楚。小無人望と書る
○うづと云と云。常木の色。小きく。うづ。牛のたけ

あ〜と多く又葉集第四

うらむらひしをあらはしかなん人ま〜るをほろととて

① 祢ぶと 葉集抄うらにきよま〜しもの事ハ願ふ

とてま〜しとてま〜しとて祢ぶとま〜しとてま〜し

了 徳子コト和名

四季か白

燕中 泉郎 此仕業をお〜へる

瘦〜妻 出たあ〜あ〜水や城の依

あ〜鱈や 天の川 激の負ひ〜

あ〜長〜藤岡 短〜ち〜と〜

○ 今昔物語小。筑西乃未申の方小あら〜て。は〜の

中又大を依崎を。是を度羅島といふ。いふ人の形チハ

人う〜。人を食ま〜。ま〜水ふ〜。人の中又人

似ぞ拍喰ふ者を。度羅人といふとま〜。今俗間小。人

小似ぞ行跡あ〜。人をも。度羅うちといふ。是等より

中〜は〜ま〜。度羅氏といふ。

○ 俗諺小。おのほどよたを。点のうち人もま〜といふ

と。源氏小。人小点は〜。ま〜ま〜ハセ〜とおま〜の

をとらり

○ 世俗小。川原ふとにま〜。石を。ちり石といふ。ま〜

ね〜と〜。關伽の水といふ。た〜い〜。ま〜

〜ハ石なり。山信道の風俗。石を〜といふ。ま〜

上ノ口

集小人丸 一帯の傍るれいらりこぞとよめはも。いハ祭
語。くらハいーくと有。日本紀第十應神天皇御歌由
羅能斗能那訶能異句離珥とよみゆるも叙云句離
ハ石也異ハ助語とよむ

○又かてとまてまどつふし。まぢあをまーくかて
ハ加而なり万葉小山上臆良老病を愁つは長秋よ
老くあれあ身れ人小やまじも六助字也かてーあれとよ
めれけとくとつふと老のうへ小病をらつて今云か
てとつふのしとて明く

○今遊女の歩むをハ文字をぬきてなごつふと土佐
日記小一とふ字もむに知ぬものも是ハ十とより

壽和人の欲さるみくまうもゆう今 楚波
還鷹乃賀甚とむふ 一々一蛇なう其を招くと
まに六人まーと七隻のたひひさうらや
ましく白居易の伝を志し己年名心の宴をありそ
ゆんや座ハ鬢髪小まつてはらなりとて詞酒乃
間小のハ且舞且調小琴乃若小庭の松尾城さう
ひ洞小声梁塵を動す筆並対うつり各ぬるま
をりすれ

はより にはまきやうじん尚齒

稻垣氏六十賀

ふる若殿平 福く指ひをむさく初

○系此の書、其意、一日を破りて、
 ら、か、お、い、も、い、く、十、つ、い、つ、
 ね、一、明、和、八、幸、卯、交、六、月、念、一、日、予、う、生、日、と、り、な、る、を
 くら、昌、久、か、ま、ま、を、い、い、し、望、ま、陶、米、う、像、を、う、け、
 二、ハ、菜、子、う、我、を、か、手、壽、々、い、を、辱、多、し、と、辱、あ、る、人、を
 二、そ、い、一、ハ、い、家、今、日、い、く、と、い、い、ん、や、自、か、す、
 夫、彼、を、我、を、か、す、あ、い、い、を、か、す、
 親、よ、も、
 と、か、て、い、い、水、草、の、下、も、
 嗚、
 幽、遠、隨、筆、卷、之、下、畢

ふ、
 ○遊、里、小、す、い、と、ま、
 せ、り、職、人、盡、教、合、キ、ち、
 舟、乃、老、小、お、い、い、
 遠、よ、の、く、れ、
 角、虎、に、
 上、五

ふ、
 ○遊、里、小、す、い、と、ま、
 せ、り、職、人、盡、教、合、キ、ち、
 舟、乃、老、小、お、い、い、
 遠、よ、の、く、れ、
 角、虎、に、

とらりてとら

○又ワウ記ふくまふ。うちむれ能細き。或ゾノク
とらりてとら

○又女なごふふ。うへひけしをそ人ふ。いつてまご
驂ハハもくふ。といひ

○又女なごふふ。うへひけしをそ人ふ。いつてまご
りは集り

○又女なごふふ。うへひけしをそ人ふ。いつてまご
なり。註ま。いまはき。ハ余と。涼切ふ。や。妹を。と。ま

○又女なごふふ。うへひけしをそ人ふ。いつてまご
こま。今の。後。續。よ。り。ま。り

○又女なごふふ。うへひけしをそ人ふ。いつてまご
七回集ふ。みづくし。久。弟。の。ワ。う。ま。び。い。ま。こ。らん。破。の。弟。根。の
枯。よ。く。折。も。み。が。く。ハ。瑞。く。と。あり。拍。を。答。へ。は。詞。く

○又女なごふふ。うへひけしをそ人ふ。いつてまご
○柔和る。う。け。ふ。と。や。う。と。り。ハ。も。回。集。ふ
芦。垣。の。中。に。お。ま。に。と。や。う。に。お。と。り。ま。は。り。人。ふ。ま。り。ま

○又女なごふふ。うへひけしをそ人ふ。いつてまご
○女。と。と。を。ま。り。と。り。ハ。も。回。集。中。臣。宅。守。歌。よ
「今。竹。の。大。主。人。ハ。今。ま。り。や。人。な。ら。が。り。の。ま。の。ま。り。は。ん

○又女なごふふ。うへひけしをそ人ふ。いつてまご
大。宮。人。ハ。今。も。人。ま。り。を。ね。む。へ。れ。む。女。の。ま。り。ま。り。ん
乱。る。な。り。こ。い。つ。は。之。中。臣。朝。臣。宅。守。越。前。國。ハ。流。罪。之。時
夫。婦。贈。合。ハ。十。之。首。の。中。な。り。日。本。紀。通。證。曰。遠。来
狎。觸。之。義。男。女。相。戲。曰。奈。夫。留。云。云

歳五

中しぬぬ指折初ん女七夕

童三

雖酒もきくも居くと巴のまじ

端午

葺けぞちど水在祝く菖蒲山

七夕

乎れをさやけはちとく鶴を糸

重陽

飲むうちハ樹の村少あり菜萁袋

歳暮

赤くはぬいもくよ先んむ園結雪

○昔倍小指を拵るを。かうすとりもたさしとどく

おちろばおた小。おちろばおた小。のぞきまらどいとた

おちろばおた小。おちろばおた小。のぞきまらどいとた

おちろばおた小。おちろばおた小。のぞきまらどいとた

おちろばおた小。おちろばおた小。のぞきまらどいとた

○口ふさげたとまてとどくも同書小女からいぬを思ふなぬあ

と。いとまてとまてとどくも同書小女からいぬを思ふなぬあ

○又口のこにうれまどらハ常事たおた小。花山院素子珍

寶及王はとつるす錢。口れをにうけさせめとあり

又後撰集小。同をれとよとてそけぬの口れ入り

かほと人をよよ物らんとよあり

○世俗小あやし地をを劔の刀をけり居分地をどり
も。塚川院大印而首小後杉杉長

○又わくわくをこれゆかし歩む人のうろろ乃あやうきれつ

ちこよ〜〜かごりよ
○又坂の園の枚むし引をといをちふ足ゆる五月の弱

きちらハ小斑之杉村を引をとい本此間を居月影よて
馬のゆび〜〜い〜ゆはより〜の俗見乃預よくかきよなは

○志どろもといゆと〜る俗説し古あよ
日本紀秋則放天斑駒チアノブチコマツ云々

○志どろもといゆと〜る俗説し古あよ
よりい〜とよ記名ハ〜し〜のい〜み〜れ〜る〜志〜と〜と〜

とよあり又使衣もい〜志〜後ゆ〜ろ小如小〜た也
よえり

○世俗小咳ふとほよく〜をた〜はと云日本紀小爲カガ
吐とあり

○物小驚〜をたびゆると〜り〜万あふおづの〜
あ〜も〜み〜は〜ら〜が〜ちゆ保と流人のおひゆを

○又抽の〜〜〜〜たり〜を〜し〜地をを〜し〜と
〜は同集〜と〜い〜人〜を〜あ〜い〜と〜い〜あ〜人〜あ〜

よ〜り小端〜あり〜ら〜あ〜なり
○う〜〜〜す〜や〜〜俗説ハ出〜く〜ま〜〜〜出のう〜ど〜

やうふといふ。同書小出をうーとよせり

○又志どけたるといふ。ハ書物まとも写しつゝの
四度校合せされをん落しどし有ふより抄り終密
なるべしを志とけなりといふ。志とけなりといふ文字小

四度校ふと云ふ。一東光院殿は抄ううと云

○物をちりうどよりと云ハ長度と云べしとぞとけ
なりよりといふ

○俚語小抄抄をよんべといふ万葉小

「あつさりり常事と云ふ久このよんべのあつさりりは久

○又よさらりと云ハ作を抄録小云よさらり決つうと云

うてことのみよ又紫式部日記小云よさらり東交

のまけりてと云ハ抄録よと云ハ抄録紙云よさらりハ
とくと作しと云

○そく素れあどりあをあらよせと云。と云ハ近く也
遠近といふこと。素れと云ハ抄録小。此國の帝六十

余代小なるをのよれと。け次筆あはくくべき小何
らぞ。あらよりけれと云ハ抄録よと云

○昔倍小。このうき事。うん。と云ハ伊勢
抄録小。あつなる女の尼小。あつてせの中を。うん。と

けり。抄録よ。あつむげ。小。と云ハうん。と云ハ
愠ノ字。うん。と云ハ。愠ノ字の音を和語よ。と云ハ。

てとも。うん。と云ハ。愠ノ字の音を和語よ。と云ハ。

かりク、ウト同韻ヲ通せ。らんをうんとはいり

○夜まぜ日中せふといふ俗傳も古きことぞ

「あまのつげをききねとてうしきりねありぬよねを
なまらんと万葉よよまらりつげとい我へ

○俗小男子をわこと云釈日本紀小稚子ハ男子の通称
也と云今云わこはつ子の中略也

○又父をていと云七神樂うこ小

「うらたがささのさるね山小のりきししらのぞ
どゆはさつてハ薩人の父といふことぞ」愚業抄

○屋ねふく板をさざむと云古きことぞ
「いざ板もくみける板屋のいえはくこととあり

○物のうすくさるをうすらくと云と回書小

「うさ山夕ぬるやむらうすうぐむとよまら」薄往
者とあり

春興

梅咲や鼻あきく漕くを河川

避暑

涼——花異をを色出——青きん

踊

夕白乃咲拵やいほおらちうふ

小景

鴨沼水引上り並ワ——うね

○昔修小物をアテて好ましくとをを目小付と云

越川百首

○越川の山回れ庵はめふはきと書行やうらりりり

○おのひあーとまこいごと日書り

○秋のそめゆきまぬれとさひなりて涼ーとらり

○秋のそめゆきまぬれとさひなりて涼ーとらり

○菊ひまといわし色葉集り

○物なやあつらひぢきみくものやうと云葉花物

○行よなきまゝのひあまみずあよせと秋あつらふと云

いづれはわりやにまゝんと云く又長明教心集よ
紙葉めあつらふ付んとつめ刻とせきれと云もわ
なうそてえうびづふと付らふはもあつらぬみくぞと
なりと云く

○酒をみきとつめ酒を吞人乃身よハ風をさすまけ
て何と云く故又三寸とあてみきと續といふ

六條のまはまゝ伊勢御三寸進と云り

○物をきり發よすを花やと云りやと云り花さぬと云
引人ハ花やと云りやと云りくゆてまゝと云り云り

后文定子のほくこ

○昼時事だといふつと云くも同書よいづらうと云く

はまうに。いふまゝのつごをせんと。扇乃風もぬき〜院〜
くれむとま〜

○障子さどめをなつをぬらしとまも 同書小かろや
あまれとぬらしし〜の香いとたろ〜

○か〜師〜たをやろ〜きといつても昔の四季物語云
朝日けい馬のあ〜そらいとま〜ては社乃らち此か
とろ。やろ〜たふとま〜

○獨物まどろち 食物を鬼食と云も 同書小云茶乃
けろにたろ。鬼かぬをさ〜とま〜

○物をで封らる小飯いとろいといふも古きことになり
たろあ云をさ〜あろ。さよ人の文をさ〜。か〜ふた

きろ。そ〜い續飯あ〜をらあろは。んき〜あ〜

○道乃りゆづりまぢ〜をさ。かい〜を〜とろ。乃茶
牙十二高山乃茶の〜をろあとよろ。はいまどつよと
ま。がいとつよも古きん

○抱おあやうほとつよも 拾遺集小 風をさ〜出峯乃着
あふ〜も〜れどあやろや〜人のゆれとよろ。又あや
ろり抱といふを。あ〜もの〜いつり。原氏考友のを〜。め
ろほ〜寺れべ〜。大〜の。うぬ屋小傳のあ〜ものと
かんあげと傳〜。躬恒集云

ひさたまあ〜をさ〜あ〜んさふいの〜とあ〜あぬ。
とろあれと傳とねよせろ。ねよや。らやかりぬ〜んと。

いづるなり 証 田事記

○田舎人の何とせよかやよと云哉。何とせよ。かくせんと云
る紫芥十四おとせるとかもあやふかか。さうと云うめり何
とせるとか此の。あはさく。さ^何せるとも今所謂田舎
とて是く

○又どうせまいか。うせまい。なぞと云う同巻小ひると
けえとけふ一紐の家をふとあるけえけえへさけまい

はさくは

ある事此風のさうりハ柳

はさくは

さめよん——雪をさふる花の坂

奴等さるり竹樂乃はま歌やさ

夕乃花

入おや人の花を雪 花 静

いとちさくは

あささるの柳 桜や 咲くはさく

まんきや

連翹やうれハ葉ある 離 産

はさくは

みハたさくは——さうあは 燕 ふうふ

○あ——たさくはさくはさく。大ささる鼠の。水溜め
乃ちち小死なふあり。引上るるに此鼠乃ち人なる足小

ちいさな蛤は川の蛤に似てゐる。それをうぐすす糸の如
人のこぼしより。蛤をねるせうきと。水ちりりとの通
小はぬきとけし。氣のさうきとておさうし。か
まはぬきとけし。蛤乃口はさむきと。かの赤足とい
かご出るとせし。にぬきとけのぬきと。口をふくむとけ
氣をさうきと。おさうきと。水ちりりして死なぬといふ
ちりり。遊ぶくわきと。おさうきと。蛤おしらして。水ち
はしりり。おさうきと。溺れ死すといふ。さうきと。おさうきと。
おさうきと。ちいさな蛤をぬきと。大なる氣をさうきと。
いふ。小人信じて。おさうきと。又蛤のさうきといふ。人
理をさうきと。おさうきと。されぬ人のうち出れば不思議乃

はふろー。ちいさな蛤。大なる。信じて。おさうきと。又
おさうきと。おさうきと。おさうきと。おさうきと。おさうきと。
おさうきと。おさうきと。おさうきと。おさうきと。おさうきと。

○稱徳天皇道鏡之陰猶不足。被思食以薯蕷。作陰
形。令用之。給之間折籠云々。仍腫塞及大事之時。小
手尼 百濟之醫師 其手如嬰兒。奉見云。帝病可愈。手塗油。欲取之。
爰右中弁百川靈狐也。云。拔釦。切ニ尼肩云々。仍無療。
帝崩 古事談 文ノ一、

○萬壽三年四月。女長七尺余。面長二尺余。乘舟。寄丹
後國浦。舟中有飯酒。觴邊之者悉以病。惱仍不令着
岸之間死去。云。同上

上之三十四

○寛徳二年二月有白鳥羽長四尺許身長三尺来住侍從池七侍從池ハ西件鳥鳴詞有飯無菜ト同上
○丹後國普甲山云山寺僧大般若虛讀好而為業已經年序畢或時手披經卷虛讀之間後頭強被毆覺程兩眼拔付經卷面云件ノ眼ヒツキタル今ニ彼寺ニ有ト云

○出羽守源齊賴ハ自若冠之昔至衰老之時以飼鷹為業不冬夏家中ニモ少許飼之家人之許預之田舎ナトニモ又巨多ニ置タリケリ。七旬之後目ニ雉ノ嘴生出。兩眼損ニケリ然而自身仕事ハナケレ氏少々ハ猶飼テアケクレ手ニ居テ搔換愛レケ

リ。爰ニ或人信濃鷹ヲ儲タリケルヲ。此齊賴ノモトニ持来テ云。西國ニ侍モノ此鷹ヲ給テ候。今ハ御覽ゼ子ハ詮ナク侍ト奉申合トテ居テ參侍也云。沈病席之者聞此事起出云。有興事哉。西國之鷹モ賢ハ敢信濃鷹奥鷹ニモ不劣物也。將テヲハセハ探ニト云ケレバ。進寄テ鷹ヲ移シケレハ。白髮ニ帽子カツキテ直垂袴ニ九寸許ナル腰刀ノツカニクス子イト巻タルヲ。脇ツボニサシテ鷹ヲ居移之後氣色モ殊外スクヨカニ成テ。タカダスキヨリ探上テ。取手ナド探テ。右ノ拳ヲ足ニツノ間ニサシ入テ。打ウナツキクシテ云。心ウキ事哉。盲

ニナリタリトテ。ハカリ給ケルナ。是ハ信濃ノ腹
白カ。柶鷹ニコフ侍ケレ。西國ノ鷹ハ。カヤウナル
毛サレ。骨置ノシタラバコソアラメト云ケリ。最
後ニハ鳥ノ毛遍身ニ生テ歿ケリ 同上
○小右記曰長保元年九月内裡之御猫産子。女院
左右大臣有産養之事有衝重。椀飯納莒之衣等云
猫乳母馬命婦時人笑之奇怪事也云々 尚と云
馬命婦一笑なる人

更衣

花の香やと物脱てて櫃臭き
椀椀下奥女院のしあらしのへ

首夏

今あはれく又その蚊屋の白ひし

五月雨

けろく水や縁りしにちあらしの子

林鐘朝

男ひなふししつと啼つる沙室は

竹夫人

婦とま水を扱ふておろし弁し主人

色はく銭老乃はけり色や竹夫人

夏の吹

日暮やるる子あ嗅ふ間乃宿

日暮や冬の月安乃人通
一擲拵は苗入りもどけられ
夕暮や 袴を裾より奥の院
白雨の名残おちりた柳

○俊頼朝臣の抄おえ 帥内大臣と申す人の中に
を少くして、ふいに死なれど。志を成すに成さぬのせ
て。おほらふをいふるに。まればふをいふるに。は
まのありふはりり。まをいふるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま

良暹法師書のはらるる白志なるもくはるるよめる

死出の山まことぬたをあるは口の雪をふりてまんとすむ
うせらるる日よめる業平中ね

いふはよ道といひてまうとつるまはおもえま
むうの人のいふまう。あつふもまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま

○宇治大納言物語よま藤原のゆさちり父越後守為
時ふとまをいひて彼まへを伝うるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま
まのいふるに。はまをいふるに。はまをいふるに。はま



腹黄白色^ツ夜鳴聲如振鈴^カ言^リ里里林里林^ニ今
 之出と云ふは形声として小兩書^ニ一いつうと云ふ志
 うれももさ名付る西ハいつう不審なきよあふ。知
 呂林と唱を。松出といふんと授ふさ小似たり。是ハ
 いのれより。流俗出の名をえち之松出を鈴出
 といひ。鈴むしを松出といひたりせざるを。考ふ
 さるてさるさるを松出へ。一書云松出の音ハ
 松風の凜として動ふあつたはよきと。古人の名付
 たり。らんちろ正と唱ハ鈴出之。法沙れきいとつよの
 をふはさふ。よく似れど松出の動、死小松出乃
 音をきく。鈴むし^レの鳴るやハ鈴の音の対縁

なるふがむ。これむしういふよう。名付さるる
 時成たたるを唱ふさむと云ふはさるあり。おても
 ろふときは説く。今按るなり。和歌として松出の
 音は松風小ふとてよめは多し。卷終四首
 「琴の音小かよふ聲の秋風を松出の音やさる後
 慈鏡和尙住吉社百首
 「住吉は、うさ乃をやれ出の音小木の音とて松出を吹
 光基院入道二品親王五十五首冬議雅經句
 「あてきりきりしとらん草の系糸小まのふ松出の音
 又延喜七年高子院御門の時。西河行幸せざるをの忠
 岑和歌序云山の端小月松出うういして。さむ乃

いふ小あやうきせはら時を此へのすむ虫成りて谷の水
き小ゆらうりれときくこれもさむの音小といふ
まふらちねん小よせあはれく琴の音小音のねんを
かふりしふとよめるよききく一終虫とさうて谷
乃あ音小とあるはさうさうさうしかさこれ能と
まふ小ねんさう。さうれと今いとゆきねん終虫一
よて。終虫ハねんさうさうさうさう。既小猿樂乃係
曲ゆし。さうねんさう乃音ハさうとてとも。さうのねんさ
の音ハさうさうさうさうさう。さうねんさうさうさうさう
といふ。又捨べうさう。且大和本草に中華書味見
之さう。貝原篤信の博識さう。かくこれさうさう中華

陳氏花鏡云
金鐘兒マンシ
似促織身黒
而長銳前豈
後其尾皆岐
以躍為飛以
翼鼓鳴云云

の書さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ま本集よ

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
夢改上人

○系葉集小字好むこの中れさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
たさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
れ子産さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
つの子産さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

のぼりて。さすかふ毎の学。歩をくらめられを大にを
何ぞや。喰ひくらみ候て。時依小が。然ともそあれ
とや。これ。あうりて。えら。ちとに。ほ。く。き。れ。と。二
輝。鳴。て。あ。う。り。て。か。り。と。や。く。を。文。書。ハ。を。く。や
せぬ。もの。な。れ。を。は。も。あ。ん。と。を。け。く。と。ま。い。さ。れ。を
く。と。鍾。信。は。を。

「学は終るるの作をまめきておののりもひ敷らるを
とハよこめひくらみ候べ——江談云藍縷鳥者鶯子
也昔人宅之樹陰造巢生子漸生長之比近臨見之
自鶯頗大羽毛漸具舐其羽即奇思之間ホトキス
ト鳴去了云々又續々繕物候くも菩提樹陰とらふ

寺ハ。あ。れ。傍。房。の。池。の。蓮。よ。を。け。子。を。き。り。こ。う。ら。る。を
終。ふ。入。る。う。ひ。くら。に。学。の。や。終。よ。ら。と。て。物。を。あ。な。も
く。これ。を。学。の。子。が。り。ら。と。と。知。り。ふ。これ。ど。ま。あ。ぬ
れ。く。を。や。ふ。し。似。ざ。ら。と。これ。だ。あ。や。く。思。ひ。く。経
ふ。よ。の。や。う。く。ね。と。ふ。く。か。り。て。ほ。く。あ。れ。と。鳴
く。れ。を。昔。よ。り。い。ひ。傳。へ。ら。古。と。は。く。や。か。う。ら。る。を
と。思。ひ。あ。る。人。の。よ。め。る。

「親のおやふらうのうらうらに郭公をわが学のみこは子なるうら
とくく詩よし郭公屬夏有佳名好事家々嗟歎成
鶯子巢中春刷翅兔花牆外曉傳聲汝呼同類孤雲
路人詠和言五月程低簷雨滴寂寥夜歌枕不堪相

待情と作まう 叙蓮禪

詩よ生子^ム百鳥^ノ巢^ニ百鳥^ノ不^レ敢^テ嗔^テ仍^テ為^ニ飯^ス其^ノ子^ニ 前後和
漢とし小かたれ

○まづおをやふへの事 ぶらう 鄭云ハ昔如いりけり
乃ら乃の賜^{トガ}もろのをそりてかきこぶアールいそりりお敷
そけくわ小あつる居やうれそのやとりてまれそそり
さうえはとをまもて。そを賜のるこことしを飛ふへとも
ゆめとへる。ナツれえ世の古ことふてきりうま敷か説七
なぐれん。やうふ事小ねひいころを。むもせさし
られたすのふまうら。予がいと好まら。叫菴乃。ぬ
まくの木れ梢小。枝のひこ体を。さうはささころるま

そを梢まこくづきあつるは。そやより菴中さ体
るりまこをたひり。そ賜のそやふありくわとま
らま。はつとに文書いんごさうと。後彩おたれあつて
おひあをそくま。悪甚昌久まどふもそを侍りて。無
しぬ。猿とらつるをを細細せし。又梅のおれ枝小。一
ニすけり。おれり。さうら。とまら。はつと。よくく。んれ
むもみ。まを。ち。は。さ。さ。り。く。の。い。ま。ご。と。と
む。の。く。さ。ふ。日。影。の。映。し。て。さ。う。と。ま。ら。な。り。を
い。よ。く。賜。の。そ。や。ふ。は。事。ま。ま。ね。ま。ら。す。と
つ。の。日。ハ。小。山。儀。な。ま。け。を。ま。ら。地。友。ら。の。あ。う
で。ま。ら。す。け。り。く。れ。ん。ふ。し。え。せ。ん。と。ま。あ。ら。す

小おのひ侍りーがき聖と侍りくはれむ。ばやいづら
りりりらん。ふく川ともまうらるる

菅家萬葉集

ホトキス キキタツハリ 郭公鳴立春之山邊庭杳直イタサネヒト不輸人哉住濫ヤスラン

かく御集小のそとせりて古きふまは是をぞ院と長

永照菴之記

○おもー荒後山のちうら小かことうちをはいちをいぢむ
まふこと侍り。そとさうーさうら。系遊樂れくぬ管む小
河〜流。そとさうら春族朋友のくぬ小ーもあ〜次。
せふーかうらうらけい急。ちか〜又ハ先〜さうー
おのひの菩薩をそと小。う〜さ〜云何補経おこ

あうととねふとさうら〜。されむなるを安んじー。白
檀木をそと川。観音のる像を造りきり。ふき人
〜さうー大慈千子の抄きいふをれ〜う〜めん
とたると。うらそと侍り。のさぬハ。東入り生駒乃ら
高く。玉兔頂上小界。西小天龍寺ま〜。空鳥
門中小屋川。葉が飯ハ小をく。墨のけを南小遠
なり。右小四天王寺ま〜。六時堂乃鐘時〜小ひ
左小龍澤礼祿院あり。日課より〜小静〜。晝ハ
指小多れを〜。おを海茅小虫れ音を〜ら
ぬ。とひある人ふ〜れむ。浮世の〜を〜と〜と
書を〜ま〜ば古人の〜。往事を〜。心を〜

さうらの花ハ山崎と云く又新古今集

志々草の香ハ山崎と云く又新古今集

はかろく此峰。契仲云俗々々々山崎と云。隨々々

按小頓河のおろく山ハ山城おろく此峰ハ大和といふ

も是るる。さうら山崎ハ山ハあり。け山西ハ

河州河内郡。東ハ和州平群郡を以て大和といふ

べし。龍田ハ平群郡なり

○大坂ハ津のふ第一の湊より廣大の地と云く

其古名古書和名等小いふこと見ゆ。さうら山崎

日本紀第十一卷仁德皇紀

二十二年春正月天皇納八田皇女將為妃時皇后

贈答歌曰

阿^ア佐^サ豆^ツ磨^マ能^ノ避^ヒ介^ガ鳥^ノ瑳^サ介^カ鳥^ノ介^カ多^タ那^ナ耆^シ珥^ニ滁^チ致^チ

喻^ユ區^リ茂^モ能^ノ茂^モ多^タ愚^グ譬^ヒ且^シ序^ゾ豫^ヨ積^キ

釈日本紀云阿佐豆磨能朝妻也在^在避^ヒ介^ガ鳥^ノ介^カ多^タ那^ナ耆^シ珥^ニ滁^チ致^チ鳥

瑳^サ介^カ鳥^ノ介^カ多^タ那^ナ耆^シ珥^ニ滁^チ致^チ鳥難波地名在^在避^ヒ介^ガ鳥^ノ介^カ多^タ那^ナ耆^シ珥^ニ滁^チ致^チ鳥

岸の巽^{ウツ}生^ユ玉^{タマ}庄小坂村有。後世村民繁業して民

家廣大の地となり。時の人小坂を轉して大坂と云ふ

矣。土佐日記云らふ。さうら山崎ハ山ハあり。け山西ハ

れさうらを致ふ。和名さうらめと云く。さうら山崎ハ山ハあり。け山西ハ

今大津と云是等の類なり。

立秋

口くま秋を告ぐや 夢風吟

七夕

夜ふくや 虫ふはふくく 星ふよみ

日後朝

鶺鴒てふよみ鳥 子く 夕の別れ

水燈會

道うかや 御後ふきのあけ乃川

良夜

天下晴ふく 鳥や 月と青

良夜野行

名月や 家影かと 戌月の伝

探題
田月

早稲刈るや 一斗獲て小水の月

九月十日之夜

後とつふ 萩のやう 後乃月と青

古くは月や 小十と 一と萩のやう

田十之萩

くま 一月の萩と 後の萩の月

秋乃吟

月ハ峯ハ小松 風くく 花禁可れ

石小萩 後よりハ 一と 女而花

古戰場

道平の萩とハ 浪色をくまへ

廿日の布楽へおろきし木槿山
朝鳥や神壁へもよこしつて
川岩や花うらぬるし

○宗祇法師ハ人王百二代稱光院應永廿八年辛丑
誕生百五代後栢原院文龜二年壬戌七月晦日死
八十二歳墓所ハ駿河國境桃園と云所山林小定
林寺と云寺也志しに松の本一本を植宗長素純塔
を建と云し

○一首少くもこれ一を記す歌

烈々代の久し人なきふくもてそ枯し
住吉の松
けふ小世のしつせり

久し^{ホホ}く^{ホホ}き たる^{現世} ふハ かひ^{過去}こそ枯し

此一常の住いこのやうあれと大ふかき
心を付く人しと云 芝山宰相殿説

○小武娘の内侍ハ生ぬのかよとてさしとくやみ才斗
此時乳母小いごうれいねあやうが是より衣をよこさ
らぬむめのとあきをとてさし小武娘

いつのまにや 誰うまつて此かうひさや
とつひににめのやいと驚く心をよみまきと云
婦をけくおとのふとてさし小武娘と云し

後撰集小親お小はうりておろくゆりし川をハツな
りむまきと云のよと云

丹波守藤原
元真甲斐守
清那息云云
三十六哥仙
之一人也

神皇正統記云云
又ハ中宮御抄云云
樹のむらさき
俊頼御抄云云
あいき紀土端の
子よハとせざり
[考]よふとせざり
之真ハ十一
[句]いそぎ
十二小
[花]は

又ハ云々

○予ハ
任ハ
を祖
ト小
は時
ハ月
ゆりぬ
小ハ
引ハ

はあ乃月。予ふんせをわなうんどのひよりひてよ免あどが
とくし紙ふ。とくしあふかきさる哉。又の口縁尾れを
より又せしぬ。あまのうらふふんどのつがさよはにゆぬと
まゆより。回舎よりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ふうゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
菴中の閑情をねむい志と。哀小恙。侍りて。女付
侍る。はあきれふ人。まはゆいありて。縁尾ふゆいゆいゆい
とゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
○一とゆい道好ゆい女相撲といゆいゆいゆいゆいゆいゆい

見物まのちうくをうか。と小出きて。盲者さどゆいゆい
すまひゆいゆいゆいゆい。官より停止せゆいゆいゆいゆい
雄畧紀をえりゆい乃喚集采女使脱衣裾而着犢鼻露
所相撲^{トヨミイナ}ゆい女相撲ゆいゆいゆい有ゆいゆい

冬の吟

蟻船乃姿やふぬ乃旅とゆいゆい
こして干出傘へおれ紫の時ゆいゆい
夕立れ空似をゆいゆいゆいゆいゆい
言ゆいゆいゆい
寒さゆいゆい花と人あゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆい

上
獸炭を白糸と化しおきし

初容奇

上
しり書や朝起むりえそし仕也

けり書や人筆より筆はれしより

業著住吉の吟

わたりや河川はぬまん帆うけふね

せんや

裾きしまの細く候 甚

○何事や四方ふびりて好んで釣もよみ紀の路の奥
くを尋あつた志ぬいのけりよいそり越乃し
れしぬくこたうしらのふふりたれはしり好む

柳とやしんあまの柳のむとえ枝攀て旅衣をさし
古口しとそりゆりうしらの園ふしり並しつたのま
芽え生ひ出や枝葉を催しりれを柳の糸乃ふりた
そもゆしそえんと其陵山の色りある吉祥寺の
庭ふりつし種てきりきとをそらのまに人ふりた
うしをがらのやまのうしとよりちえはしぬが従侍の
とらしをえ集り幸よえさりぬふもきり需りか
まよろしき

昌喜

上
しり柳とやしんあまの柳のむとえ枝攀て旅衣をさし

まよろしき

今按遊行柳の事猿樂の謡曲ハ粗するしねきどし

いさこそ和説を著し且西行の所より和方と御
集等小決りて見ゆるは彼道のへ小清水なるは
の御ハ一書云大治二年の頃多御殿へ御幸なら
せ行ひてそとを御所の内障子の絵におり御
かりと歌を御説くは時の秋湊経信太助となど
とまてつれもといふはゆれ々中へ小憲清とて
是は繪とも乃中へもさるるにふよとてま
まの地より作らるるは色ハまじりのうちふよとて
ぬきり上る

信のさるる柳の陰小水成陸の女房とてさる
旅人
ゆれ

道の小清水さるる柳陰とてさるるはゆれ々
是は時信障子の絵を懸くはゆれ々は十首のち
なりは十首は小秀逸とてその時の書定信時信と
小書せし大治二年十月十日勅禄小あつりて朝
日丸とて内をせを行へる又待賢門院はゆれ々
きて権中納言殿の内つらぬ乃御幸なりて乙女之
ゆれ々をさるるは紅いのみ十五のさるるゆれ々
からけりゆれ々ときく本朝歴史曰大治二年十月
上皇幸于鳥羽新造之高閣御覽辟障之丹青掲
以為題命廷臣有歌名者詠之憲清亦廁其列奉
進十首上皇感賞以御劔賜之命能書者繕寫其

所詠女院聞之又特賜御衣數襲寔清纏頭（麻出）
人皆以榮之（是）又麻書小回（一）此四のイ首は
秋九首懸（一）以て新古今小乃きりて西行
彼極を詠せられたるはあはれなるものなり
女子口實（一）て傳ふるも文人墨子考へざるべし
○連秋ハ倭建命坐酒折宮之時新治筑波に
小ねりて後万葉の河川の事と以てしめしめし
つり今按ふ迹比婆理都久波の後さの川の事なり
兼て連秋乃神あり古事記清寧皇記曰於是志
毘臣歌曰意富美夜能袁登都波多傳須美加多夫
祁理如此歌而乞其歌末之時袁祁命歌曰意富多

久美袁遲那美許曾須美加多夫祁禮（多）是れは
ふれ末を乞ふとあれを連秋の躰なり（一）は分のこと
ハ同答のそ味あれとて長々れを（一）つ
○聖德太子此薨あ日太子傳又二月廿二日とあり
而天王寺聖靈會也廿二日ふて太子薨日とあるは今
案に舊事本記曰廿九年己丑朔癸巳夜半皇太子
上宮既戸豊聰耳尊薨于斑宮（斑宮）是二月五日之
○俗小物の多き哉ふらうといひ又ふらうなりといひ
是麻第十四回さきをけふふすさふらうすといひ
是麻草を苧管小多うほらうといひ之ふらうは
乃集う多をいふといふ今よりふらうふらうと

○昔俗小き一歩りきりるふおりのささいまづるこぬ
松多紙云いこおれのくりきりるふさ一出家のり
さいまづりこく才狂也人をささ地理をまけておりの
○免錢をささといと片言とて新まろ人おれと万
と名屋のせりきをさおつりきさくもとよめり
○世俗小死ぬるを目をふさくといと雄略記云朕
瞑目何所復恨ムラ多云い

○紀州の玉津島に玉いつる乃略語れつちおれ吹
上のまきり
判を症て彼のよるて小玉の結ぶぬささあたる玉いつる島
おほつるききる彼のささうせえ玉いつる乃といえきり

玉出る時よりあそつてこの彼ささよえる人ある付
○連歌を五十句百句とほつぬるさハ後を相院の御
代建保のれより始つるといふ一の連歌ハおろ小丸
く又七又乃向るといひ出れを能る下れ句を付てくの句
おつれ出れえ上の句をつらぬおほく秀句對句をえて
具一はささ小く何事といふ人のさハおてささめ
ささく無あつり多ささや拾遺集より

よひ小くささおほよのささく作れり
天曆御製
さよささ今ハ新ささくさり小々り
御家小ささいしてささく
あけのささ

夏よりあかへき人松後くん

金葉集 田中小馬のころをこそ 永原信原

田子と心約ハくらまへありけり

永成信原

苗代の水よわかけとて之はれと

大和揚流ふらよひききとてきんと整うころ秋女の

きうけきうしうけつふとてせひつをきき申て秋の

文ぬらんとおもほはふけとてはききのまをれをせ

ふうりきとてパルらげきしおとめの人ふとい

アハハ

人くらりきり今ハあめやよ

とよみりきよおとろき

良少翁

ゆきふとめやとぬぞらり

と付りやりくらと

○予一日丹波がわらむうひはるをくらよ日本紀とよ

居るらりきとてふと

わら文字小ぢやとふら

とよみりて丹波さうあつひ

なまらとて紙佐國うきやふおら

○連歌のなる小切字とらふらもまの世小字とれら

事うら上右よハさるこやもされらう伊せ物原

わら人乃りこれとぬれ男之うわれ

後撰集

白鳥乃おろよあやまこのおろしれん
是等切しつゝあはれんよよれをなれん
らきこり志うを今の子よハ切し字小傳授とら
さんまよや

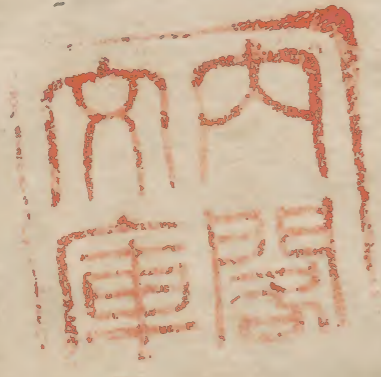
○客といふ或人妻命ふよりくの文字十ッを分
よろりそ歌ふいそ

むさしおつはの小登の家のうのうあ月の歌の
平賀の歌の扱うといは侍んとつゝ客いそよれ
とらまよはらさうらまー たまひそやこよま
らんやうとせめらま

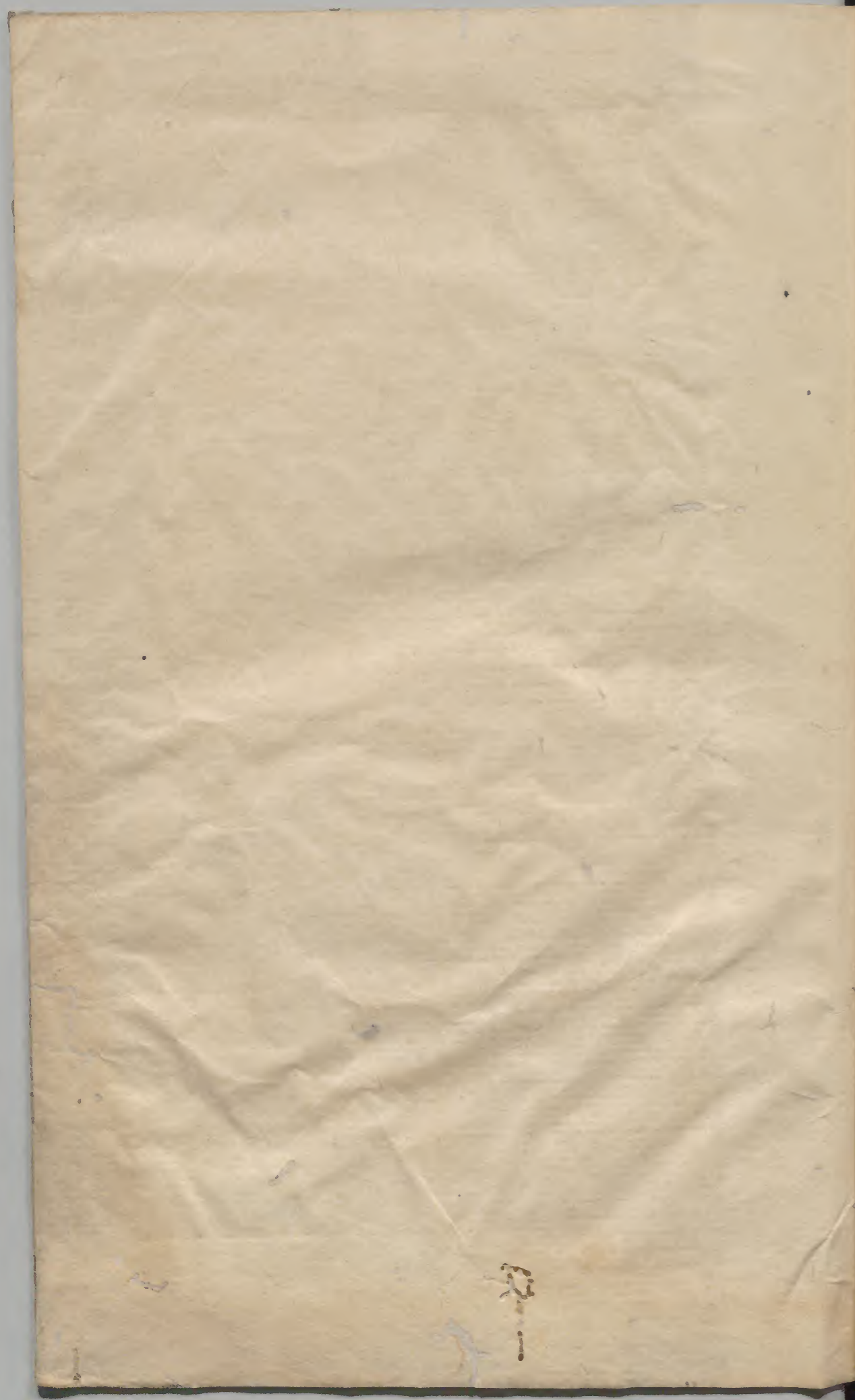
いふこのゆれのりまかーの

よりおつはくのかけろふの小登

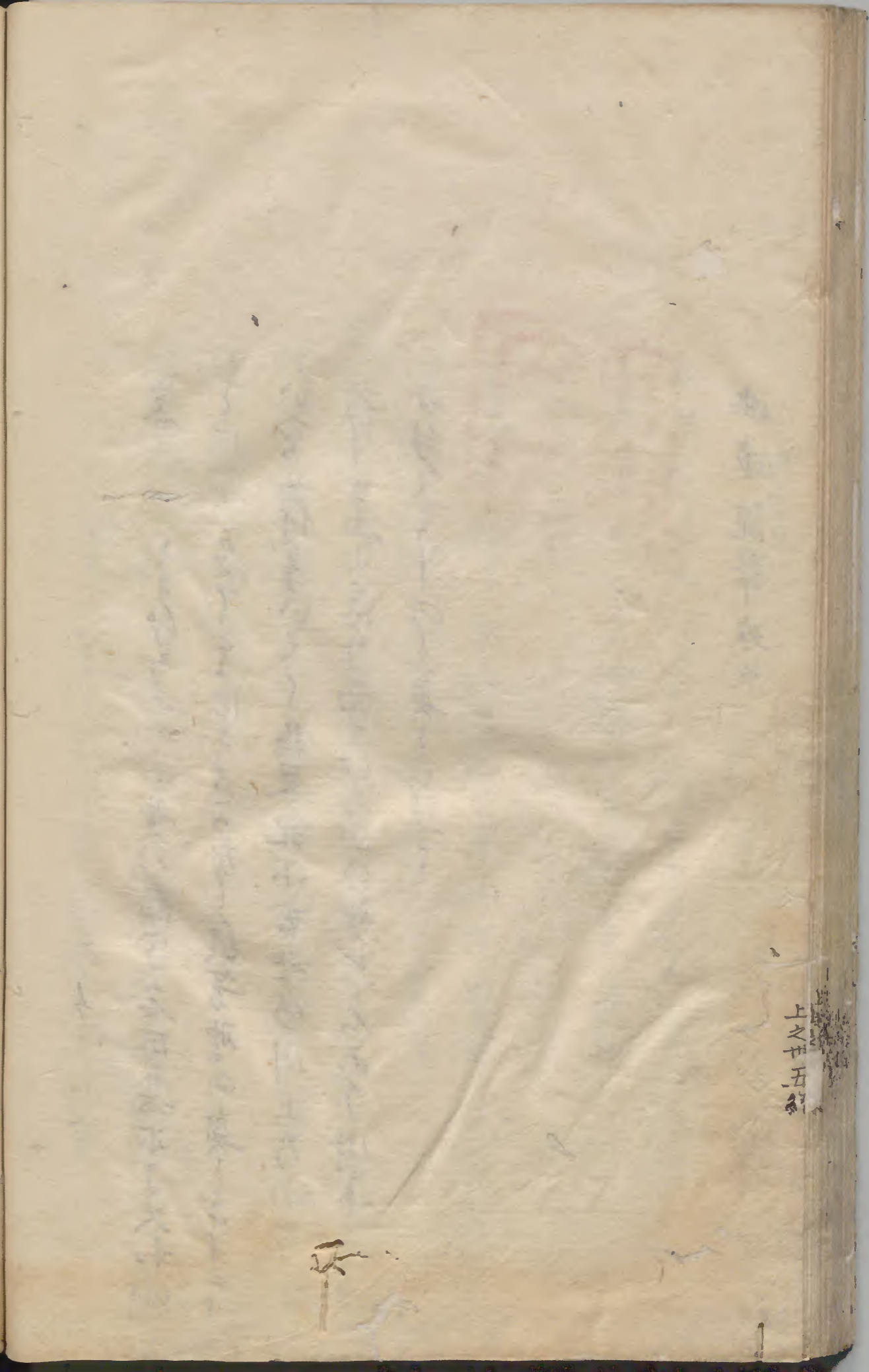
客のいそけろふの小登ハ類字名所集ホよ大和
とけろりまてそはらさうらまーん芳登の奥とら
いづらめ何予いそく雄畧記小吉登の川上乃小登小
指しめふとらり而けろふの登れ名あり川上
小付くよりの奥とら



幽遠随筆卷之上終



一



上之廿五

一

